

## 日本の高等教育のグローバル化!?

日 時： 2018年10月13日(土) 13:30~16:30 その後懇親会

会 場： 早稲田大学国際会議場第一会議室

主 催： 「日本の高等教育のグローバル化」実行委員会

共 催： 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

助 成： 鹿島学術振興財団

## フォーラムの趣旨

2012年に日本再生戦略の中で若者の海外留学の促進とグローバル人材育成が謳われ、5年が経過した。グローバル人材の育成には、多方面かつグローバルな観点での議論と政策が不可欠であるが、現在の諸政策は外国語能力の向上と異文化理解の体得を推進するに留まっている。例えば、TOEFL・TOEICを利用した英語習得及び評価や英語での授業展開を中心としたものや、海外留学の推奨など日本から海外に出る方向に集中していることが挙げられる。また、その対象が日本人に限られている点など、現時点におけるグローバル人材育成の方針は一面かつローカルな視点から進められているようにとれる。

一方、教育の受け手であり、育成される対象である若者がこのような現状をどのように受け止め行動しているのかはあまり議論されず取り残されたままである。今後スーパーグローバル大学(SGU)から全国の大学にグローバル人材育成教育の政策がさらに促進・拡大されることを踏まえると、今一度現状を振り返る必要がある。

そこで本フォーラムでは、高等教育のグローバル化をめぐる大学と学生の実態を明らかにし、同様の施策をとる他国との比較を通して同政策の意義を再検討する。さらに日本に住み教鞭を執る外国人研究者が中心となって発表することで本テーマに新たな視点をもたらすことが期待される。

## プログラム

《開会》13:30 総合司会：張 建 (Zhang Jian) 東京電機大学特任教授

挨 拶：今西 淳子 (Imanishi Junko) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会代表

《問題提起》13:40~13:55

## 「スーパーグローバル大学の現状と若者の受け止め方：早稲田大学を例として」

沈 雨香 (Sim Woohyang) 早稲田大学助手

早稲田大学は、キャンパスのグローバル化とグローバル人材育成に積極的に取り組んでおり、日本人学生の海外留学はもちろん外国人留学生の受け入れを精力的に進めている。本発表ではこのような早稲田大学のグローバル化現状を把握した上で、早大生へのアンケート調査結果から日本人学生の海外留学・海外キャリアに対する意識を検討し、現在の高等教育のグローバル化の在り方に一石を投じる。

《講演1》13:55~14:15

## 「日本の高等教育のグローバル化、その現状と今後の方向について」

吉田 文 (Yoshida Aya) 早稲田大学教授

本発表は、日本において1990年代後半より人口に膾炙しはじめた「グローバル人材の育成」をめぐる、財界・政府・大学の3つのアクターがそれぞれどのように意図のもと、どのように関わったか、また、その過程でアクター間にはどのような関係が構築されたのを明らかにし、日本のグローバル化対応を考察することを目的とする。分析の結果、企業の海外進出という点でのグローバル化が進むなか、それを担う人材を求める財界の要請は、政府に受容されて新たな政策課題とされる。当初は財界との関りで経産省がリードのもとにあったこの課題は、人材育

成という点で文科省も取り込まれるようになったことで、大学がグローバル人材を育成する場として指定される。こうして産官学のオールジャパン体制でグローバル人材の育成体制が構築されたことが明らかになった。

《講演2》 14:15~14:45

### 「韓国人大学生の海外留学の現状とその原因の分析」(逐次通訳付)

シン・ジョンチョル (Shin Jung Cheol) ソウル大学教授

「韓国人大学生の海外留学の現状とその原因の分析：日本への示唆を中心に」  
本発表では、韓国における海外留学の現状を分析し、その原因の理論的分析を試みるとともに、発表者の観点から、韓国の大学生の海外留学モチベーションを整理し、提示することを目的とする。加えて、海外留学が韓国の教育及び社会全般に及ぼす肯定的・否定的影響についても考察する。

【コーヒープレイク】 14:45~15:00

《事例報告1》 15:00~15:10

### 「内向き志向なのか——地方小規模私立大学における《留学》」

関沢 和泉 (Sekizawa Izumi) 東日本国際大学准教授

日本の若者の内向き志向が言われて久しい。福島県いわき市に位置する収容定員 820 名の東日本国際大学では 2015 年度より英国への留学プログラムを新たに開始し、選抜の末、毎年 10 名前後の学生が、短期語学留学ではあるが、海外での生活を体験している。参加を希望するに際しては、入学前の経験もあるが、経済的な支援があるかが重要であるようだ。また、他所でも指摘されているように、一度短期の留学を体験した学生は、その後、長期の留学を希望するなど、きっかけがあれば海外への志向が高まる傾向が見られる。他方、同大学では、海外からの留学生の受入れ(出身国はアジア圏の学生が多い)と、近年国レベルでの対応が本格的に開始された、卒業後の日本での定着支援も行ってきた。受入れと送出しの双方がどのようにつながっているか、小さな大学の事例ではあり、エピソード的なものになるが、規模や立地の違う事例として報告したい。

《事例報告2》 15:10~15:20

### 「関西外国語大学におけるグローバル人材育成の現状」

ムラット・チャクル (Cakir, Murat) 関西外国語大学講師

関西外国語大学におけるグローバル人材育成の概説と短大生の海外での就職に対する意識について検討する。当大学では 2018 年からほとんどの授業が外国人と共に英語で履修することになり、海外留学と同じレベルの学習が実現する新たなグローバル人材育成プログラムがスタートした。いわゆる「関西外大流グローバル人材育成プログラム」で全学部・学科の学生が対象となり、高度の言語力と寛容な心と共に客観的・論理的思考力、コミュニケーション力、ネゴシエーション力、ファシリテーション力を持った人材育成を目指すプログラムである。発表者が担当する授業の受講生を対象に行ったインタビュー調査の結果、上記のプログラムの効果ともいえるべく、海外での就職に対して肯定的な認識を持っている短大生が特に女子学生に増えていることが分かった。

《事例報告3》 15:20~15:30

### 「日本の高等教育のグローバル展開を支えるサブプログラム事例」

金 範洙 (Kim Bumsu) 東京学芸大学特命教授

国際社会は、グローバル化や科学技術の目覚ましい進歩に支えられ、国境を超えた情報の共有や発信が個人レベルでも日常的に行われるようになった。高等教育の分野においても、国際的な教育協力の試みが政府や学校、民間レベルで活発に提起されている。事例発表では、報告者が関わっている日中韓教育コンソーシアム (ICUE) の概要やその実践事業例 (コンソーシアム型韓国短期留学プログラム) について紹介し、運営の経験や

成果、今後の課題、拡大方案について意見を述べたい。この韓国短期留学プログラムは、大学の韓国語科目履修生を中心に 2009 年から延べ 800 人の学生が参加し、修了生は国際ボランティア団体を結成して韓国語・韓国文化の学習の成果を生かした日韓の文化観光広報（ブログ・SNS）や交流支援活動を行っている。政府間共同事業と関連しては、東京学芸大学・ソウル教育大学・北京師範大学のキャンパスアジア事業「東アジア教員養成国際大学院プログラム（IGPTE）」【大学の世界展開力強化事業】についてその概略を紹介する。

《フリーディスカッション》 15:30~16:30

## 「日本の高等教育のグローバル化!?!」

— 討論者を交えたディスカッションとフロアとの質疑応答 —

モデレーター：シム・チュンキヤット（Sim ChoonKiat）昭和女子大学准教授

《閉会》 16:30

閉会挨拶：角田 英一（Tsunoda Eiichi）渥美国際交流財団事務局長

記：フォーラムの内容は、後日 SGRA レポートとして出版します。

### 講師略歴

〈沈 雨香（シム・ウヒャン） Sim Woohyang 〉

早稲田大学学士、同教育学研究科修士、同博士後期課程在籍中。早稲田大学教育・総合科学学術院助手。専門分野は教育社会学。

主な著作：“The Educational Aspirations of Saudi Arabian Youth: Implications for Creating a New Framework to Explain Saudi Arabian Society” 2016、「高等教育のグローバル化は大学生の国際意識を変えるのか？—国際交流の教育効果と地域偏在する国際観—」2018年12月、ほか。

〈吉田 文（ヨシダ アヤ） Yoshida Aya〉

東京大学文学部学士、同教育学研究科修士、博士。放送教育開発センター助教授、カリフォルニア大学バークレイ校高等教育研究センター客員研究員、メディア教育開発センター助教授・教授を経て、2008年より早稲田大学教育・総合科学学術院教授、大学総合研究センター副所長。専門分野は教育社会学。

主な著作：「教養教育の学習成果の測定は可能か—2000年代アメリカの取り組み—」『高度教養教育・学生支援機構紀要』第2号、東北大学。（2016年）、「高等教育の拡大と学生の多様化—日本における問題の論じられ方—」『高等教育研究』第21集（2018年）、他多数。

〈シン・ジョンチョル Shin Jung Cheol 〉

成均館大学行政学学士、ソウル大学行政学修士、米国フロリダ州立大学哲学博士。

大韓民国教育部の事務官、書記官、課長(1988-2006)、International Encyclopedia of Higher Education の Editor-in-Chief、Book Series Knowledge Studies in Higher Education の Editor-in-Chief。

現在：ソウル大学教育学科教授（2006～現在）

主な著作：University Ranking, World-class University, The Future of the Post-Massified University, Mass Higher Education Development in East Asia, Doctoral Education for the Knowledge Society, Higher Education, Studies in Higher Education, Minerva, Asia Pacific Education Review ほか多数。

〈関沢 和泉 Sekizawa Izumi 〉

東日本国際大学（福島県いわき市）、教育改革推進室長 兼 IR 室長・准教授。

ヨーロッパ中世の言語思想についての博士論文で、パリ第七大学にて言語諸科学博士。

その後、デンマーク、コペンハーゲン大学での客員研究員を経て現職。

〈ムラット・チャクル Cakir, Murat 〉

渥美国際交流財団 2014 年度奨学生。2015 年度に関西外国語大学特任助教。2015 年筑波大学人間総合科学

研究科教育基礎学専攻博士後期課程単位取得退学（教育学）。獨協大学、文京学院大学、早稲田大学、筑波大学非常勤講師、トルコ大使館文化部／ユヌス・エムレ・インスティトゥート派遣講師。

〈金 範洙（キム・ボンス）Kim Bumsu〉

SGRA 研究員。一般社団法人国際交流振興協会（JAI）会長。和洋女子大学・横浜国立大学韓国語非常勤講師。東京学芸大学特命教授（国際担当：キャンパスアジア事業など）。日韓同時通訳・法廷通訳人。（韓国）国立公州大学客員教授。（中国）師範大学東亜文化研究所の客員研究員。2006年から東アジア大学の国際連携組織の結成による教育協力体制の構築や共同事業を目指し、東アジア教員養成国際コンソーシアム（ICUE：2009年結成、会員校44大学（2017年6月現在））、日韓教育大学長フォーラム（2008年第1回開催、会員校：23大学）、百済文化国際シンポジウム（2009年第1回開催、国立公州大学・奈良教育大学のほか）など、今も10年以上の活動を継続している国際コンソーシアム・組織の創立企画や結成、運営などに関わっている。

## SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ（[www.aisf.or.jp/sgra/](http://www.aisf.or.jp/sgra/)）をご覧ください。

## SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。